クリスマスの前史を読む

ルカによる福音書1章39～56節

高橋克樹牧師

エリサベトとマリアが会ったとき、エリサベトの胎内の子は、マリアの胎内の主イエスに出会った喜びで踊ったのでした。エリサベトの胎内の子は、後の洗礼者ヨハネです。しかし、実はこのヨハネはイエスが「来るべき方」であるかどうかの確信が全く持てなくて弟子に聞きに行かせています（ルカ7章18～19節参照）。エリサベトとマリアが象徴する先駆者ヨハネと救い主イエスの関係は史実に重点がおかれているのではなく、神があらかじめ定められた目的に従って出会わせた出生前の関係性なのです。

ルカ福音書1章39節冒頭は原文では「これらのことがあってから」となっていて、エリサベトが身ごもってから6か月目、マリアが聖霊によって神の子を懐妊してから、という意味。マリアに聖霊が臨んで、彼女はナザレからユダの町へ出立したのです（1章26節参照）。『山里』は伝統的にエルサレムの西8キロにあるアイン・カレムだと想定されています。マリアはエリサベトの家に三か月ほど滞在したようです（1章56節参照）。41節の原文はカイ・エゲネトで始まっているので、神の関与によって事が起こったことが暗示されています。エリサベトの胎内の子ヨハネはイエスの母の声を聞いてイエスの存在を感知し喜んだのでした。この喜びを実現させたのは、二人を出会わせた天使ですが、その天使が仕えているのは神ですから、結局、ここでも神がエリサベトの胎内のヨハネを聖霊で満たし（1章15節）、神の子イエスを身ごもったマリアに出会ったエリサベトも聖霊で満たしたのです。41節と44節の『おどった』（スキルタオー）は、七十人訳（ギリシア語訳）の創世記25章22節で、イサクの長男エサウと二男ヤコブの双子が「押し合う」と訳された語と同じ。なぜ、ルカ福音書記者が創世記のヤコブの誕生物語を参照したのか？それは成人してから自覚する使命が既に胎児のうちにすでに神によって定められていることをしめしたいからです。双子が胎内で押し合う＝小躍りしたことを心配した母リベカは当惑してヤハウエの聖所に行き、子供の将来についての託宣を受けました。ルカ福音書記者はエリサベトの胎内の子ヨハネに神の使命を与えられていることをヤコブ誕生物語をヒントに構成したのです。42節『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています』は、マリアの母性を讃えているのではなく、マリアが『主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう』（45節）という神の意図を受け入れているからであり、さかのぼればマリアが『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように』と、彼女が神の意志を受け入れた信仰的決断を讃えているのです。42節『胎内のお子さまも祝福されています』の原文は「あなたの胎内の実（カルポス）は祝福されています」。マリアの胎の実は良い木が良い実を結ぶように（ルカ6章43節）、聖なる霊が結んだ聖なる実であり、この実は神によって祝福されているということ。しかし、この祝福された実であるイエスは、種が地に落ちて百倍もの実を結ぶように（ルカ8章8節「良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ」、ヨハネ12章24節参照）、自らの命を落としたのちに多くの人々の内に信仰の実を結ばせるのです。イエスに祝福が与えられるのは、イエス自身を通して多くの人々に祝福が分け与えられるためでした。このように、洗礼者ヨハネとイエスが誕生する前から神の意図が働いていたことによってクリスマスの出来事が起こったのです。